

浮世絵に見る浴衣の動向

Trends in Yukata Fashion Through Ukiyo-e

福田 博美

FUKUDA Hiromi

要旨

浴衣は江戸時代に「湯上りの身拭い」から「夏の庶民の普段着や外出着」に分化したとされる。本稿は、その背景に袖形の変化が関係しているのではないかという仮説を立てたうえで、浴衣を描いた浮世絵を178点抽出し、用途・袖の形状と仕立て・染織に着目して調査した。その結果、「湯上りの身拭い」の浴衣は「広袖」を基本に、女物は天明期（1781-89）には「丸袖」が見られ、広袖の袖口下を千鳥掛けした浴衣も広まった。寛政期（1789-1801）には丸袖に千鳥掛けが見られ、文化期（1804-18）には広袖の千鳥掛けに加えて、狩衣の袖括りのように大小の刺縫いで袂部分を曲線に縫った浴衣が現れた。文政期（1818-30）にはかがり糸が太くなり、袖下に大小の刺縫いや丸袖に太糸で袖かがりされて多様化した。天保期（1830-44）以降は「角袖」となった。一方、男物には刺縫いや袖かがりは見られず、天明期に広袖から角袖に変わり始め、文化期に広まった。以上より女物の袖形の変化により浴衣が普段着や外出着に変化したことが実証できた。また、浴衣の染織は、縞や絞りがそれぞれ全体の2割を占める一方、中形の模様染は4割と多く、中形が浴衣の代名詞とされた点が浮世絵からも確認できた。

●キーワード：浮世絵 (ukiyo-e)／浴衣 (yukata fashion)／袖形 (sleeve shape)

I. はじめに

現在、着物を着る機会が減少する中で、浴衣は夏のおしゃれ着として愛好され、自由な着こなしが見られる。浴衣の先行研究¹⁾は着物に比べて少ない中、清水久美子（以下、清水と表記）は「浴衣の歴史とデザイン」を主題として江戸時代を中心にまとめた3報²⁾および総論³⁾において体系付けた。その中で、浴衣は江戸時代に「湯上りの身拭い」から「夏の庶民の普段着や外出着」に分化したとされる。本論文は、その背景に袖形の変化が関係しているのではないかという仮説を立て、浴衣を描いた浮世絵を抽出し、その場所や状況から用途を捉え、袖の形状に着目した実証を試みた。

浴衣は、平安時代の湯帷子にはじまり、入浴時または浴後に用いる麻の単である。江戸時代に入り、木綿の普及に伴い、麻の湯帷子は、木綿の浴衣へと交替し、夏の着物として一般化した⁴⁾。江戸時代後期の喜多川守貞（1810-没年不詳、以下守貞と表記）著『守貞漫稿』には、

浴衣は白地を専とし又晒し木綿及眞岡木綿を用ふ
(中略) 白地に藍縞或は鳴海絞り柳絞りを用ふ⁵⁾

と記され、本稿では浴衣の染織を模様染・縞・絞りに分

類してその特色を捉える。また、揃物の浮世絵に描かれた夏衣裳と呉服店の広告に着目し、浴衣の染織の動向を浮世絵と照合したい。

II. 江戸時代の浴衣

江戸時代初期の『日葡辞書』には「Yucataユカタ (ゆかた)」の語句が見られ、「Yucatabira1, Yucata」の条に、ユカタビラ. または、ユカタ (湯帷子. または、ゆかた) 後者は省略形. 湯で身体を洗う者が、自分の身体を拭くための帷子⁶⁾

と記され、当時の浴衣は湯上りの身拭いに用いられた。

身拭い用であった浴衣の多くは消耗されたと推察されるが徳川美術館には徳川家康（1542-1616）着用の麻浴衣が33領現存する。白麻浴衣15領の内角袖が5領、丸袖が10領⁷⁾で、袖口の開いた広袖と袂を有する角袖と丸袖の形状が見られた。

江戸前期の風呂は蒸し風呂で、その時は汗拭いの浴衣であり、中期には湯を張った風呂に変わり、入浴後の水分を拭うものとなる。後期に銭湯が広まると、「浴衣を持って湯へ行て」⁸⁾とあるように浴衣を抱えた男女の様子

が浮世絵に見られた。式亭三馬（1776-1822、以下三馬と表記）の『浮世風呂』には挿絵⁹⁾が描かれ、「初がお浴衣を持てお迎に來たぞ」¹⁰⁾と下女が浴衣を持参し、浴後の光景では「でつちはあとよりゆかたをかゝへてしたがひ行」¹¹⁾と丁稚が使用後の浴衣を抱え持った様子も記される。

Ⅲ. 浮世絵に見る浴衣の用途

1. 浮世絵に描かれた浴衣

江戸時代、夏の装いは絹物を主とする「単衣」と麻の「帷子」、木綿を主とする「浴衣」に大別され、いずれも裏を付けない単仕立ての着物であるが、前者の2点は長襦袢を着たのに対して、浴衣は湯文字のみまたは何も身に着けずに用いられた。そこで、長襦袢を伴わないことを浴衣の条件として描写された浮世絵を178点抽出して表1にまとめた。

ここでは、浴衣の袖形に着目して用途・袖の形状と仕立て・染織の項目を立てた。一部、染織を捉えるために袂が明確でないものも含めた。

2. 浮世絵に描かれた浴衣の用途

浮世絵には江戸中期以降に浴衣が多く描かれた。図1は西川祐信（1671-1750、以下祐信と表記）の肉筆画で、湯文字を結ぶ美人は白地に藍で大柄の丸模様を描いた浴衣を纏い、衝立には裏地の紅絹が際立った着物が掛けられている。

祐信は正徳3（1713）年刊『正徳ひな形』で「ふろ屋



図1 身拭いに浴衣を纏う女性
西川祐信筆「美人図」 サントリー美術館蔵

風」と題して葛柄の浴衣を着た美人を扉頁に挙げ、浴衣10図を広袖に描いている。

鈴木春信（1725?-1770、以下春信と表記）をはじめ多くの絵師たちは蚊帳の内外で浴衣姿を描き、寝巻として用いられていたことがわかる。天明6（1786）年に山東京伝（1761-1816）が作画した洒落本『客衆肝照子』では、「ねまき出」の項に「ねまきひとえ」¹²⁾とあり、浴衣がこれにあたると推測した。

また、春信筆「夕立図」の絵暦で大の月をデザインした洗濯物が広袖の浴衣であることに着目したい。当時の洗濯は着物の仕立てを解いて洗い張りをしたが、浴衣は解かずに洗濯できた便利な着物で、そういった点でも庶民に重宝されたようである。

湯上りの身拭い姿は縁側付近に多く見られ、初秋の風を感じる夕涼みの光景に最適な美人画の構図となったようである。

安永期（1772-81）の鳥居清長（1752-1815、以下清長と表記）筆「箱根七湯名所」の揃物から、浴衣を着た外出のはじまりは湯治と見られ、江戸時代の街道の発達に伴ってそれが普及して描かれたものと推察した。その袖形が広袖であることから、湯治場近辺の外出には湯上りの浴衣を着用したのかもしれない。

天明期（1781-89）には女中や仲居の仕事着として浴衣が見られたが、先述の『守貞漫稿』には、

近來ゆかたなど着す女中なし、奢りなるべし。¹³⁾
と浴衣を贅沢と記している。また、

近年浴後のみに非ず卑賤の物は単衣及び帷子に代へ用ふ¹⁴⁾

と身分の低い女性が単衣や帷子の代用として浴衣を用いたと述べている。当時、夏の外出姿の華やかさは振袖姿の娘達が際立ち、浴衣姿は侍女や年配者に描かれた。

寛政期（1789-1801）は娘の湯上り姿や室内での普段着としての諸相が描写され、文化期（1804-18）にも蚊帳を背景に浴衣姿が見られた。この頃から男性の浴衣姿が多く描かれ、特に楽屋での歌舞伎役者の日常の様子や商人たちなど普段着の浴衣が多様化した様子が伺える。

文政期（1818-30）には歌川国貞（1786-1864、以下国貞と表記）筆「江戸自慢」の揃物に涼む姿が、さらに弘化期（1844-48）にも屋形船での夕涼みに浴衣姿の若い女性たちが描かれた。

外出着としての浴衣に関して、『守貞漫稿』には、

三都ともに晝は浴衣にて外出を憚る婦女も夜は浴衣にて外出するもあり¹⁵⁾

表1 浮世絵に描かれた浴衣の用途・袖の形状と仕立て・染織

No.	制作年代	絵師名	作品名	性別	用途		袖の形状と仕立て		染織			出典・図版No.	図版No.	
					場所	状況	袖形	袖口・裏衿	模様染	縞	絞り	浮世絵の所蔵先		
1	天和3(1683)	菱川師宣	新板美人絵つくし	女	縁側	身拭い	①		○大			日風		
2	享保中・後期～元文(1716-41)頃	西川祐信	美人図	女	室内	身拭い	①		○大			サントリー美術館	1	
3	江戸時代(18世紀)		化粧美人図	女	室内	化粧	①		○大			肉筆9・5		
4	明和3(1766)頃		坐鋪八景・とけひの晩鐘	女	縁側	身拭い	①		○中			揃1・7		
5	明和4～5(1767-68)頃		六玉川・調布の玉川	女	玉川縁	布晒し	①			○		揃1・11		
6			藤原敏行朝臣	女	室内	身拭い・夕涼み	①			○		浮・46		
7	明和5(1768)頃		風俗四季哥仙・立秋	女	室内	身拭い	①			○		揃1・35		
8	明和5(1768)頃か		雷	女	寝室	寝巻	①			○		浮・6		
9			蚊帳を出る女	女	寝室	寝巻	①			○		浮・31		
10			三味線をひく男女	男	池のほとり	三味線をひく	①			○		浮・25		
11			明和年間(1764-72)後期	磯田湖龍斎	風流見立坐敷八景・時計の晩鐘	女	廊下	身拭い	①			○	揃1・86	
12	安永10(1781)頃	鳥居清長	箱根七湯名所・とうの沢	女	湯治場	立ち話	①			格子		揃2・29		
13				男			①				○			
14			箱根七湯名所・どふが島	女	座敷	休息	①		○中			揃2・30		
15				女			①		○中					
16				男			喫煙	①			○			
17			箱根七湯名所・みやのした	女	座敷	湯上り	①					○	揃2・31	
18			箱根七湯名所・きが	女	座敷	湯上り?	①			○中			揃2・33	
19			箱根七湯名所・あしのゆ	女	宿への帰路	客	①					○	揃2・34	
20				女			女中	①			○			
21			安永(1772-81)中期	風流座敷八景・時計晩鐘	女	縁側	身拭い	①				○	鳥・21	
22	安永(1772-81)中後期	歌川豊春	菖蒲湯	女	軒先	湯上り?	①		○中			原7・88		
23	安永(1772-81)後期	鳥居清長	四季八景・長夏夕照	女	縁台に座る	湯上がり	①			—		鳥・29		
24	天明(1781-89)初期		色競艶婦姿・風呂場	女	風呂場	湯上り	①				○	揃2・59		
25			美南見十二候・六月	女	品川・茶屋	女中	①				格子		揃2・64	
26			又江花・文の争い	女	室内	仲居	②				○		鳥・138	
27			又江花・店前の芸者と仲居	女	店前	仲居	②			○中?			鳥・139	
28			当世遊里美人合・橋中妓	女	橋町	年配侍女	②			○中			揃2・54	
29	天明年間(1781-89)前期		当世遊里美人合・橋妓	女	座敷	年配仲居	③			○中			聚・ボ2	
30			当世遊里美人合・多通美	女	室内	化粧	①			○中			鳥・73	
31			当世遊里美人合・蚊帳の内外	女	室内	就寝前の会話	①				格子		鳥・79	
32	天明2(1782)頃		北尾政演	当世美人色競・山下花	女	室内	喫煙	②			格子		原7・175	
33	天明2～3(1782-83)頃	勝川春章	楽屋シリーズ・三世大谷広治	男	楽屋	化粧	①		○中			揃5・29		
34			楽屋シリーズ・三世沢村宗十郎	男	楽屋	身拭い?	①		○中			揃5・30		
35			楽屋シリーズ・四世市川団蔵	男	楽屋	喫煙	①		○中			揃5・35		
36				女形		立話	②			○				
37			楽屋シリーズ・四世松本幸四郎	男	楽屋	結髪	①		○中				揃5・36	
38	天明3～4(1783-84)頃	勝川春潮	柳の庭	女	屋外	夕涼み	②			○		原7・161		
39		鳥居清長	風俗東之錦・萩の茶屋	女	茶屋	茶屋娘	①			格子		揃2・15		
40				女	風呂屋	爪を切る	①			○				
41				女		着替え	①			格子				
42			風俗東之錦・湯上がりの子と二美人	女	室内	身拭い	①		○中			揃2・18		
43				女		子守	②		○中					
44			美南見十二候・五月・不動詣	女	参詣	侍女	②			○		揃2・23		
45			美南見十二候・六月・茶屋の酒宴	女	座敷	女中	②		○中			揃2・24		
46				女			②			格子				
47			美南見十二候・七月・夜の送り	女	品川	仲居	②			○中		揃2・25		
48				女			②		○中					
49				男			客	①	○中					
50			茶見世十景・やげん掘	男	茶店前	お供	④				格子		鳥・166	
51				女	茶店	店の女	②		○中					
52			四代目松本幸四郎とその家族	男	室内	喫煙	④		○中			鳥・240		
53				女		立ち涼む	⑤		○中					
54				女	川端	夕涼み	②		○中					
55	天明4(1784)頃		大川端の夕涼	女	縁台の傍ら	夕涼み	②				○	鳥・110		
56				女			②							
57	天明年間(1781-89)中期頃	勝川春潮	五節遊・七夕	女	室外	縁台で涼む	①		○中			揃2・77		
58	天明年間(1781-89)中期		浮世雪月華・月	女	橋上	年記者	⑤		○中			揃2・36		
59	天明年間(1781-89)後期	鳥居清長	田園道遊歩	女	田園道	運搬	①?				○	原7・167		
60			吾妻橋下の涼船	女	屋形船	会話する	②		○中			鳥・123		
61				女			②		—					
62			女湯	女	銭湯	湯上り	①				○	鳥・125		
63				女	銭湯	湯上り	①		○中					
64			洗濯と張り物	女	軒先	化粧	①		—			鳥・130		
65				女	庭先	張り物	②?		○中					
66				女	洗濯場	洗濯	?		○中					
67				女	井戸前	水汲み	②		—					
68			江の島詣	女	茶店	侍女	②		○中			鳥・134		
69				女	海岸	侍女	②		—					

70	天明末期～寛政初期	窪俊満	夏の宵	女	川辺	中居	②			格子		原7・197	
71	寛政(1789～1801)前期	喜多川歌麿	庭中の涼み	女	庭先	夕涼み	②		○中			原7・243	
72	寛政2(1790)頃		深川遊宴	女	室内	仲居	②			○		鳥・135	
73	寛政2～3(1790～91)頃	鳥居清長	細見をみてこいつだと女房い	女	庭先	会話	②			○		原7・150	
74			婦女人相十品・煙草の煙を吹く女	女	室内	喫煙	⑥			○		揃3・2	
75	寛政3～4(1791～92)	喜多川歌麿	婦女人相十跡・浮気之相	女	室内	湯上り	—		○中			揃3・5	
76			婦女人相十跡・面白キ相	女	室内	化粧	—		○中			揃3・7	
77		栄松斎長喜	四季美人・螢狩り	女	水辺	螢狩り	⑥赤糸			○		揃4・67	
78	寛政4～5(1792～93)頃		四季美人・月見	男	屋外	喫煙	①?			○		揃4・68	
79			茶托を持つ難波屋おきた	女	室内	茶台を持つ	⑥		○中			東京国立博物館	3
80			ひら野屋おせよ	女	室内	姿勢を正す	—			○		大・9	
81	寛政5(1793)頃		歌撰恋之部・あらはるる恋	女	室内	涼む	—				○	揃3・13	
82	寛政5～6(1793～94)		当時全盛美人揃・扇屋内花	女	室内	喫煙	①		○中			揃3・26	
83			娘日時計・午ノ刻	女	室内?	湯上り	—		○中			揃3・49	
84	寛政6(1794)頃		娘日時計・午ノ刻	女	室内	湯上り	—			○		揃3・50	
85			高名美人六家撰・朝日屋後家	女	室内?	湯上り	—					揃3・70	
86	寛政5～7(1793～95)		青楼十二時続・未ノ刻	女	室内	湯上り	①			○		揃3・40	
87			美人器量競・兵庫楼雛琴	女	室内	喫煙	—			○		大・49	
88	寛政6～7(1794～95)	喜多川歌麿	台所	女	台所	茄子の皮むき	—		○中			大・60	
89				女		火をおこす	②			○			
90	寛政7(1795)頃		針仕事	女	室内	子守	②				○	原7・279	
91			風俗三段娘・中品之図	女	室内	女中	⑥		○中			揃3・81	
92	寛政7～8(1795～96)		霞織娘雛形・夏衣裳	女	室内	会話	—			○		揃3・64	
93			霞織娘雛形・蚊帳	女	室内	会話	—			○		揃3・65	
94			名所腰掛八景・茶碗	女	室内	茶托を持つ	—		○中			大・57	
95	寛政8～10(1796～98)		錦織歌麿形新模様・浴衣	女	室内	団扇で涼む	⑥		○中			大・73	
96	寛政9(1797)		蚊帳の内外	女	室内	蚊帳外に立つ	—			○		大・68	
97				男		蚊帳の中	—			格子			
98			夜の雨	女	屋外	三味線箱持ち	—		○中			大・70	
99	寛政9～10(1797～98)	歌川国政	蚊を焼く美人	女	寢室	蚊焼	②		○中			原8・147	
100		喜多川歌麿	梅が枝が言葉	女	室内	湯茶を汲む	②?		○中			大・67	
101	寛政12(1800)頃		女織蚕手業草 九	娘	室内	糸繰り	②		○中			写・42	
102	寛政(1789～1801)後期	喜多川歌麿	あわび取り	女	沿岸	授乳	①		○中			写・43	
103	寛政(1789～1801)末期頃		頭剃り	女	室内	だっこ	⑥		—			原7・292	
104			母と子の覗き遊び	娘	室内	遊び	⑥		○中			原7・293	
105	寛政年間(1789～1801)	歌川豊国	風流七小町略姿絵・あらひ小まち	女	風呂場	身拭い	①		○中			揃6・2	
106			風流七小町略姿絵・あふむ小まち	女	寢室	子をあやす	①?		○中			揃6・4	
107			風流七小町略姿絵・関寺小まち	稚児	室内	三味線稽古	⑦			○		揃6・5	
108			煤払い	女	室内	掃除	①		○中			原5・70	
109			両国橋上橋下	男	船	船頭	①			○		原5・379	
110	享和2(1802)頃	喜多川歌麿	教訓親の目鑑・ばくれん	女	室内	飲酒	⑤?⑥?		○中			揃4・2	
111	享和2～3(1802～03)頃		咲分ケ言葉の花・かゝア	女	室内	授乳	—		○中			揃4・31	
112	享和3(1803)		婦人相学拾鉢・煙管	女	室内	喫煙	①?		○中			揃4・24	
113	享和年間(1801～04)	歌川豊広	団扇を持つ女	女	屋外	夕涼み	②?	袖口:紺色		格子		写・133	
114	享和～文化前期(1801～18)	葛飾北斎	両国夕涼	女	両国	夕涼み	④?			○		原8・168	
115				女			④?			○			
116	文化元～3(1804～06)頃	喜多川歌麿	夏衣裳當世美人・大丸仕入の中形向キ	女	室内	花火	⑤		○中			東京国立博物館	6
117			夏衣裳當世美人・亀屋仕入の大形向キ	女	室内	子を抱く	①		○大			揃4・15	
118			夏衣裳當世美人・嶋屋仕入れの染しま向キ	女	室外	洗濯	①?			格子		揃4・12	
119			夏衣裳當世美人・荒木仕入の織烏向キ	女	室内	瓜皮むき	⑤			格子		揃4・14	
120			夏衣裳當世美人・白木屋仕入の栗布向キ	女	室内	着替え	⑤			斜格子		揃4・17	
121			夏衣裳當世美人・松坂屋仕入のしぼり向キ	女	室内	着替え	⑤	紺色		○		き・146	
122	文化元～3(1804～06)		美人合花角力・茶台	女	水茶屋	茶台を持つ	⑥?		○中			原7・310	
123	文化8～9(1811～12)	歌川国貞	楽屋錦絵二編・瀬川路考	女形 弟子	楽屋	喫煙	⑧		○中			写・111	
124						白粉を塗る	④	衿・緋絞り	○中				
125			楽屋錦絵二編・沢村田ノ助	女形	楽屋	立ち姿	⑧	衿・緋絞り	○中			写・118	
126	文化13(1816)頃		俳優日時計・辰ノ刻	男	室内	歯磨き	④	袖口:緋絞り	○大			没・77	
127			俳優日時計・未ノ刻	男	室内	菖蒲を持つ	①			格子		没・79	
128	文化年間(1804～18)中期頃	葛飾北斎	東海道五十三次・神奈川	男	座敷	客	①			格子		揃9・126	
129			諸商人・杜若地紙	男	舞台?	役者	④		○大			写・100	
130	文化年間(1804～18)	歌川豊国	諸商人・三升水	男	舞台?	役者	①		○大			写・101	
131			諸商人・曙山虫うり	男	舞台?	役者	①		○大			写・102	
132			諸商人・秀桂団扇	男	舞台?	役者	④		○大			写・103	
133			江戸両国すずみの図	男	大川端	水売	①		○大			原5・35	
134	文政年間(1818～30)初期		今世斗計十二時・辰ノ刻	女	寢室	腕まくり	⑦		○大			歌・57	
135			思事鏡写絵・蚊帳	女	室内	湯上り?	⑦		—			歌・68	
136	文政2(1819)頃	歌川国貞	紅毛鳥	女	室内	細工物を背景に	⑦?	緋絞り	○中			写・78	
137			星の霜當世風俗・蚊帳	女	寢室	寝巻	⑧	緋絞り	○中			揃6・73	
138			時世江戸鹿子・隅田川木母寺	女	風呂場	汗を拭う	①		○中			没・90	
139	文政4(1821)頃		江戸八景・両国ノ夕照	女	両国橋袂	夕涼み	⑦			○?		没・105	
140			江戸自慢・両国夕涼	女	室内	寝そべる	①	衿:紺色		格子?		歌・36	

141	文政4(1821)頃	歌川国貞	江戸自慢・洲崎廿六夜	女	庭先	子の行水	⑦			○	歌・37	
142			江戸自慢・開帳の朝参	女	寝室	目覚め	⑨		○市松		歌・38	
143			江戸自慢・花屋敷の七草	女	屋形船	手を洗う	⑦				歌・41	
144	文政4~5(1821-22)頃		当世三十二相・はやりさふ	女	室内	化粧	⑨?	緋絞り	○中		没・96	
145	文政5(1822)頃	溪斎英泉	浮世風俗美女競・万点水螢秋草中	女	室内	蚊帳を出る	—	緋桜模様		○	揃7・37	
146	文政7(1824)頃		御利生結ぶの縁日・妙見	女	室内	身拭い	①	緋色		○	揃7・45	
147			御利生結ぶの縁日・比沙門天	女	寝室	就寝前?	④?	緋色	○中		揃7・49	
148	文政8(1825)頃	歌川国貞	夕立景	女	室内	蚊帳を吊る	④?	衿:緋、袖:紫		○	没・179	
149				女	廊下	雨戸立て	①?	袖:緋絞り		格子		
150	文政年間(1818-30)		船着き場の夕暮	女	船着き場	女中	⑧	緋絞り	○中		静嘉堂文庫	4
151		歌川国丸	蚊帳の図	女	室内	蚊帳の中	②	緋色	○中		写・73	
152	文政年間(1818-30)末期	二代豊国	風流東姿十二支・申	女	室内?	洗い髪	⑩	緋色	○中		写・87	
153			風流東姿十二支・午	女	室内?	歯磨き	②?	緋色	○中		写・88	
154	天保2~3(1831-32)頃	歌川国芳	東都名所・佃島	男	船	船頭	④			○	揃7・7	
155	天保(1834-38)中期	歌川国貞	両国花火の図	女	橋の上		②		○中			
156				男			④			○		
157				男	屋形船	花火見物	④			○		
158				女			④	緋色	○中			
159				女			④	緋色	○中			
160				女			④	緋色	○中			
161	天保(1834-38)年間	歌川国芳	東都名所・両国の涼	男	屋形船	酒宴	①			○	原5・36	
162		歌川広重	東海道五十三次之内 原 朝之富士	女	屋外	旅	①		○中		原5・500	
163	天保14~弘化4(1843-47)		睦月わか湯の図	女	銭湯	身拭い	①		○大		文化学園図書館	5
164	弘化2(1845)頃	歌川国貞	詠織当世島・噴水の玩具	女	室内?	噴水で遊ぶ?	④?	緋色	○中		没・192	
165			詠織当世島・船の玩具	女	室内?	玩具を持つ	④	緋色		○?	没・194	
166	弘化年間(1844-48)初期頃		見立娘壇之浦	女			④	鼠色		格子		
167				女	屋形船	夕涼み	④	緋色	○?		歌・111	
168				女			④	茶色		○		
169	弘化年間(1844-48)初期		大願成就有ヶ滝橋・許由	女	室内	耳洗う	①	衿:緋色		○	揃7・69	
170	弘化年間(1844-48)	歌川国芳	八町づゝみ夜のけい	女	日本堤	夕涼み	①	衿:緋色		格子		
171				女			④	衿:緋色		○	写・85	
172				女			④	衿:緋色		○		
173			賢勇婦女鏡・大井子	女	室内?	喫煙	—	緋色	○中		原9・16	
174	弘化4~嘉永5(1847-52)	歌川広重	東海道川つし・温泉湯亭の図	女	箱根	湯上り	④	衿:緋色		○	写・91	
175			雪月花の内・月の夕べ	女	室内	膝を抱える	④	衿:緋色		○	写・92	
176	嘉永年間(1848-54)	歌川国芳	書中の夕立	女			④	緋色	○中			
177				女	田圃道	突然の夕立	④	緋色		○	写・86	
178				女			④	衿:緋色		格子		

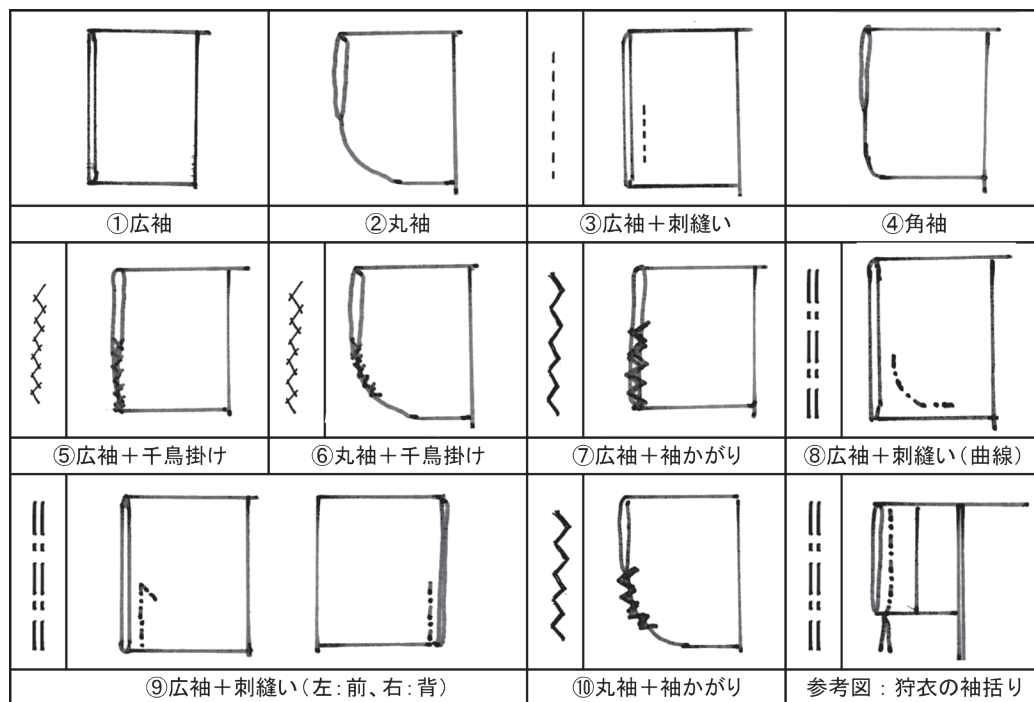


図2 袖の形状と袖口下始末の方法

と、浴衣は日中の外出着として遠慮され、夜に着用されたと記される。この記述を基に橋本美知子（以下、橋本と表記）は、

浴衣が湯上りだけでなく、夏の常着になったというのである。常着になったとは言うものの、日中浴衣を着て歩いたのではない。あくまでも家着であった。¹⁶⁾

と述べ、清水は清長筆「吾妻橋下の涼船」に描かれた船上での女の夕涼み姿を挙げて外出着の浴衣¹⁷⁾を説いた。筆者は当初、江戸時代には現代の浴衣のようなおしゃれ着の要素を有したのではないかと捉えていたが、浮世絵に見る用途からは守貞の記述通り、夕涼みや花火見物や蛸狩りといった夕方から夜の外出着であり、日中の日常着としては相対的に地味な着物であった。その要因として浴衣が寝巻として用いられていたことが関係していると推測される。

IV. 浮世絵に見る浴衣の袖形と仕立て

1. 浮世絵に描かれた浴衣にみる袖形の変化

表1の浮世絵に描かれた浴衣の袖形を時代順に分類したものが図2である。「湯上りの身拭い」の浴衣は袖口を大きく開けた「広袖」(①)を基本とし、図1・5に示す通りである。女物は天明期に流行した丸袖が浴衣にも取り入れられて袂をもつ「丸袖」(②)へ変わった。一方、検出は1点ではあるが広袖の袖口下を簡単に縫い閉じたもの(③)が見られた。この頃、男物には「角袖」



図3 丸袖の袖口下を千鳥掛けした浴衣姿
喜多川歌麿筆「茶托を持つ難波屋おきた」
東京国立博物館蔵 Image: TNM Image Archives

(④)が登場した。女物は袖口下を千鳥掛けした広袖形(⑤)が7点確認(図6参照)でき、その多くは夕涼みの「外出着」である。寛政期には丸袖に千鳥掛けした浴衣(⑥)が9点(図3参照)も描かれた。文化期は広袖の袖口下を太糸でジグザグにかがった形状(⑦)が見られ、狩衣の袖括りのように大針と小針を交互に刺縫いして袂部分に曲線で表したもの(⑧)が現れ、4点(図4参照)確認できた。文政期には袖口下に⑧同様の大小の刺縫いを施したもの(⑨)が2点、丸袖に太糸で袖かがりした浴衣(⑩)が1点見られた。そして、天保期(1830-44)以降には男女共に「角袖」が広まった。男物は女物のような刺縫いや袖かがりは見られず、天明期に「広袖」から「角袖」に変わり始め、文化期に広まった。刺縫いや袖かがりに関して『守貞漫稿』巻之十六女服には、

實用の浴衣を男女ともに専ら袂を縫ず所謂廣袖を専とす刺縫にも為ざる也(中略)故に實用の物を湯上り浴衣と云也¹⁸⁾

と、実用すなわち湯上りの身拭いの浴衣は男女共に「広袖」であることを示し、表1でも天明前期まで顕著であった。この当時、清長の美人画には「丸袖」が多く確認できる。この点について、齋藤隆三(1875-1961)は『江戸のすがた』の女風俗「衣服の仕立や着こなし」の項で、

在來の丸味のあつた髪風の風に調和した丸袖の衣服は、直線的になつた灯籠髷に釣合はなくなった。是



図4 袖口下を曲線で縫い留めた単衣(左)と浴衣(右)
歌川国貞筆「船着き場の夕暮れ」(部分拡大)
静嘉堂文庫蔵

に於て丸袖廢れて角袖が起つた。着物の形の上の大きな變化と見なければなるまい。振袖の丈も著るしく長くなつたと説かれる。¹⁹⁾

これは髪形と着物との調和の美が求められた自然の推移と述べられ、振袖の袖丈が長大化すると共に、丸袖の着物が衰退した様子が伺える。袖丈が変わらない浴衣において丸袖の流行が続いたものとみられる。図3は袖口下をかがって仕立てた浴衣の中で最も多く描写された千鳥掛けした丸袖の様子である。袂が縫われているにも関わらず、施された刺縫いは装飾的な要素を持ったものと推察される。

また、清長の楽屋シリーズでは役者柄の浴衣が特徴的である。唯一、女形(表1-36)は丸袖を着ており、日頃から女物を着したことが伺える。さらに、文化期に国貞が描いた歌舞伎役者、瀬川路考(表1-123)や沢村田ノ助(表1-125)の浴衣も広袖に刺縫いをした女物を着ており、その弟子(表1-124)も女形であるにも関わらず角袖で描写され、その対比からも日頃から女性に徹した生活の一面が捉えられた。

広袖の袖口下をかがった図は前述の『守貞漫稿』にも記され、

浴衣或は袂にし或は廣袖にす稀には上圖の如く黒紛ひ糸を以てかゝりたるあり²⁰⁾

上図とは図2-⑤と同形で千鳥掛けの糸を黒紛糸と称した。表1に見る刺縫い糸は黒糸で、唯一、栄松斎長喜(1725-95)筆「四季美人・蛭狩り」(表1-77)のみ赤い糸で描かれた。

『守貞漫稿』では単衣の袖を図解(図2-⑨と同形)して、

江戸女用の略藝の帷子及び木綿単衣は袖の前後を合せ圖の如く大針と小針と一つ挟みに刺縫袖口際に至り前を除き背一重を斜に二針刺て止る²¹⁾

とあり、卷之十四男服では男物浴衣の項で、

角袖に縫あり婦女は狩衣の袖の如く袂を縫ふこと婦人單衣の條に圖す²²⁾

と大針と小針と一つ挟みに刺縫いした図2-⑧・⑨は、同図の参考図に示した狩衣の袖括りのようであると説明している。特に図4には、三枚紵の右より二枚組で二人の女性が描かれている。左の芸者は夏着物姿である単衣、右の女中は浴衣と判断される。袖に注目すると、大針・小針を交互に曲線に刺して袂を作ったもの(図2-⑧)で、刺縫いが単衣・浴衣に共通して見られることがわかった。

さらに、同書で「浴衣は角袖と云て圓形にせざる物多

し²³⁾」と記されているが、これを表1と照合すると、「角袖」の浴衣は男物が先行し、天保期以降に性差なく広まったのである。

以上より「湯上りの身拭い」から「夏の庶民の普段着や外出着」に分化した背景に袖形の変化が関連し、特に女物にそれが反映されたことがわかった。²⁴⁾

2. 浮世絵に描かれた浴衣にみる袖口と裏衿の仕立て
享和から文化年間(1801-18)以降、それまでに無かった裏衿と袖口に緋色や緋色の絞りのような別裂が付けられた特色が見られ、前掲『守貞漫稿』には次の様に記される。

帷子單衣ともに襟のみ衿にす其襟裏緋或は淺葱又は紫縮緬年に應て用レ之(中略)又女用縮緬無地を專とすれども絞りも用ふる也鹿子絞りに非ず大絞りの物也 又帷子單物に女用は袖口を掛る²⁵⁾

ここでは、帷子と単衣について記されるが、表1から浴衣にもこの流行が反映されていることがわかる。また、先述の『江戸のすがた』で「夏の女」と題して、

裏衿に緋縮緬を付けて紅一點を添へたのは、變態趣味に生長した化政の江戸の女にせめてもの一つの自らの慰安であつたとせなければならぬ。²⁶⁾

と裏衿のおしゃれが女性たちの慰めであつたと記している。

文化10(1813)年、三馬の『人間万事虚誕計』前編「女ざらひの虚」には、

空色地に白あがりの中形で、赤い裏衿をわざわざひつくりかへして見せかけの、ソレ黒じゆすの帯²⁷⁾

と中形の浴衣の裏衿の様子が伺える。また、天保元～5(1830-34)年の『仮名文章娘節用』後編下巻では、

はでな中形のかたに藤色のうらゑりかけ黒縹子の帯²⁸⁾

と藤色の裏衿が記され、文政期の表1-140の衿は紺色で、弘化期、裏衿袖口共に表1-166は鼠色、表1-168は茶色であった。

V. 浮世絵に見る浴衣の染織

1. 浮世絵に描かれた浴衣の染織

春信の浴衣姿は他の着物同様に縞柄が特徴的である。表1では模様染の大きさを大・中と区別し、清長以降の浴衣には中間の大きさの模様染が多いことが明確であった。これは図3・4の浴衣からもわかる。それに対して

図1・5のような大柄は広袖に多くみられ、天保～弘化期においても図5の国貞筆「睦月わか湯の図」の浴衣は、縦の三筋立てに壽の字を蝙蝠が飛ぶ形で表して初春の福寿をデザインしたもので、市川家の紋である蝙蝠と壽とを結び合わせた七代目市川団十郎（1791-1859）の役者柄で²⁹⁾ 広袖の仕立てである。三馬の『浮世風呂』朝湯より昼前のありさまの項では、

十八九の白歯、よきことをきくといふ昔模様。謎染の新形浴衣をかゝえて³⁰⁾

と若い芸者が「良き事を聞く」の謎模様の新しい流行柄の浴衣を抱えたとあり、謎解き好きの嗜好が浴衣の模様反映されている様子がわかる。

表1では模様染が4割、縞・絞りがそれぞれ2割で、模様染の柄の内74点が中形であった。「中形」が浴衣の別称とされる点は浮世絵の描写からも理解できた。また、「中形」に関して宝暦3（1753）年に越智久為が染物について記した『反古染』には「宝暦の頃、茶色、はな色の中形染、本袖、広袖³¹⁾」とあり、表1の中形模様が確認できる少し前に広まったことがわかり、本袖が着物の袖ならば広袖は浴衣と見られる。

2. 染織と呉服商との関わり

喜多川歌麿（1753? -1806）筆「夏衣裳當世美人」は現在9作品から成る揃物の浮世絵で、当時の名高い呉服商³²⁾の商標を染めた暖簾をコマ絵³³⁾に掲げ、夏衣裳を装った美人たちを描いた。

① 大丸仕入の中形向キ（図6）



図5 銭湯にて湯上がりに浴衣で身拭いする女性
歌川国貞筆「睦月わか湯の図」 文化学園図書館蔵

- ② 亀屋仕入の大形向キ
- ③ 嶋屋仕入の染しま向キ
- ④ 荒木屋仕入の織嶋向キ
- ⑤ 白木屋仕入の乗布向キ
- ⑥ 松坂屋仕入のしほり向キ
- ⑦ 越後屋仕入のちゞみ向キ
- ⑧ 伊豆蔵仕入のもやう向キ
- ⑨ 舩屋仕入のかゞ紋向キ

「夏衣裳」について、文化7（1810）年に記された三馬の日記『式亭雑記』の風俗の項には、

夏衣裳は、白地のゆかた黒縹子の帯、一面の流行なりはでやかなる女は、白地の浴衣に、紅絹或は緋縮緬の裏襟をかけて、彼うらえりをわざとうらへかへりたる体に引返して着る事多くあり³⁴⁾

とあり、前章の3項で述べた浴衣に見る流行の裏衿を取り上げている。

袖形で分類すると①・②は広袖（図2-①）、③～⑥が広袖の袖口下を千鳥掛け（図2-⑤）した点から浴衣と判断される。その中で⑥は長襦袢³⁵⁾との解説もあるが、本項では袖のかがりから浴衣に含めた。他方、⑦～⑨は長襦袢を着ているので夏着物と区別した。天明7（1787）年の洒落本『田舎芝居』に「縮の浴衣」³⁶⁾の様子が記され、先述の『浮世風呂』三編巻之下には、



図6 広袖の袖口下を千鳥掛けした浴衣を着た美人
喜多川歌麿筆「夏衣裳當世美人・大丸仕入の中形向キ」
東京国立博物館蔵 Image: TNM Image Archives

縮は六月七月と二月に限るやうでございますネ（中略）「絹縮は五月と八月でございますネエ。」³⁷⁾

と麻の縮が盛夏用であった様子がわかる。⑦の縮は緋柄で表1の選別でも緋は夏着物と解釈した。⑧は唯一の振袖、⑨は富裕層の婦人と見られ華やかな夏の装いは浴衣と異なる特色を表している。

「夏衣裳當世美人」の浴衣にみる染織は、

- ① 中形：大きな模様の大紋と小さな模様の小紋と中間の型染め
- ② 大形：大きな模様（大紋）を表す型染め
- ③ 染しま：染め上げた縞模様
- ④ 織寫：織りで表した縞模様
- ⑤ 乗布＝上布：良質な麻織物
- ⑥ しぼり：絞り染め

と各呉服店から選りすぐりの模様染・縞・絞りが紹介され、中でも縞は染めと織りの技法別に示され、浮世絵の描写では読み取れない染織技法がわかる好資料である。浮世絵の版元と呉服店の連携が江戸の染織文化を発展させたものと推察される。

VI. おわりに

江戸時代に浴衣が「湯上りの身拭い」から「夏の庶民の普段着や外出着」に分化した背景に袖形の変化が関係しているのではないかという仮説を立て、浴衣を描いた浮世絵から用途・袖の形状と仕立て・染織に着目して実証した結果、浴衣の袖形が広袖から袖口下を閉じて袂を作る仕立てに変化することによって分化したことがわかった。特に女物にその変化が顕著である。なぜ、袂を作る必要性が見られたのかは、外出における身だしなみと共に、一部には袂落としの匂袋である掛香³⁸⁾（表1-122）が携行されたことも関連しているのではないかと推察できた。また、袖下をかがる現象は広袖から丸袖へ移る傾向が見られ、千鳥掛けから太い糸のかかりに変化する頃には袖口の裏に緋色の布が付けられ、装飾化された。図2-⑨に見る曲線の刺縫いに関しては『守貞漫稿』には記載がなく、他の資料にも記録が無かった。

また、表1より現在の浴衣のような角袖は、男物は天明期に発生し文化期以降に普及、女物は文政期以降に広まったと捉えられた。本論文ではその背景を袖丈の長大化と関連付けたが、加えて成人後の女が着た留袖に身八ツ口が発生したこととの関係が見られ、『守貞漫稿』の図解にも八ツ口の文字が記されている。³⁹⁾

最後に、浴衣を「中形」と称する背景が浮世絵に見る

中形の模様染の様子から確認できた。

注

- 1) 浴衣に関する初期の先行研究は次の通りである。
 - ①鷹司綸子「ゆかた」『被服文化』第88号 1964 pp.55-60
 - ②北村哲郎「ゆかた」『衣生活』第143号 1969 pp.10-12
 - ③南光容子・西沢正子「浴衣についての一考察」『園田女子大学論文集』第11号 1977 pp.15-26
 - ④橋本美知子「浴衣の歴史的考察」『京家政短期大学研究紀要』第18集 1979 pp.24-38
- 2) 3報は次の通りである。
 - ①清水久美子・岡松恵「浴衣の歴史とデザイン—江戸時代前期を中心に—」『日本服飾学会誌』第20号 日本服飾学会 2001 pp.9-17
 - ②岡松恵・清水久美子「浴衣の歴史とデザイン—寛文から元禄期の雛形本を中心に—」『日本服飾学会誌』第20号 日本服飾学会 2001 pp.18-26
 - ③清水久美子「浴衣の歴史とデザイン—江戸時代を中心に—」『民藝』8月号 第824号 日本民藝協会 2021 pp.2-9
- 3) 清水久美子「浴衣の歴史とデザイン—浴衣の始まりから現在まで—」『総合文化研究所紀要』第18号（同志社女子大）総合文化研究所 2001 pp.137-155
- 4) 拙稿「湯帷子」『被服学辞典』朝倉書店 1997 p.446
- 5) 喜多川守貞著、朝倉治彦編『守貞漫稿』上巻 東京堂出版 1973 p.255
- 6) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳 日葡辞書』岩波書店 1980 p.105
- 7) 並木昌史「徳川家康着用麻浴衣の復元製作報告」『徳川美術館論集』徳川美術館 pp.65-73
- 8) 水野稔編『洒落本大成』第10巻 中央公論社 p.38
- 9) 神保五彌校注『新日本古典文学大系』86 岩波書店 1989 p.8
- 10) 同書 p.24
- 11) 同書 p.122
- 12) 水野稔編『洒落本大成』第10巻 中央公論社 p.208
- 13) 前掲5) p.298
- 14) 同書 p.255
- 15) 同書 p.297
- 16) 前掲1) ④ p.27
- 17) 前掲3) p.142
- 18) 前掲5) p.298
- 19) 齋藤隆三著『江戸のすがた』雄山閣 1936 p.113
- 20) 前掲5) p.297
- 21) 同書 p.255
- 22) 同書 p.297
- 23) 同書 p.297
- 24) 『守貞漫稿』における袖の形状について、橋本は図を取り上げて
 - ・湯上がりにすぐ着られるように、袂は縫わず、袖口からも風を通すように広袖に仕立てる。（本稿の図1-①）
 - ・船行納涼などに用いる場合は、袖口下を黒緋い糸でかがってある。（本稿の図1-⑤）
 - ・浴衣を単衣に代るものとして用いる場合は、袂にするが円袂ではなく方形にする。（本稿の図1-④）
 - ・江戸では袖口下を、黒や白又は茶の色糸で刺縫いにする。濃色細微の縞や緋でも木綿であれば同じように刺縫いする。

- 京阪では刺縫いはない。(本稿の図1-⑨)
と捉えた。一方、清水は袖の形態を次の4種類と記述した。
①湯上りにすぐ着られるように広袖に仕立て、袂は縫わない。
②船行、納涼などには、袖口下を黒紛糸でかがる。
③浴衣を単衣がわりにする時、袂にするが、方形とする。
④江戸では、袖口下を黒、白、茶などの色糸で刺縫いし、京阪
では刺縫いをしない。

- 25) 前掲5) p.297
26) 前掲19) p.217
27) 日本名著全集刊行會編『日本名著全集』第1期出版江戸文藝
之部 第14巻 滑稽本集 日本名著全集刊行會 1927 p.621
28) 日本名著全集刊行會編『日本名著全集』第1期出版江戸文藝
之部 第15巻 人情本集 日本名著全集刊行會 1928 p.621
29) 拙稿「歌川国貞画『睦月わか湯の図』一初春の福尽くし」
文化学園図書館「図書館だより」149号 稀観本 108 pp.3-4
30) 前掲9) p.82
31) 森銑三・野間光辰・朝倉治彦監修『続燕石十種』第1巻 中
央公論社 1980 p.212
32) 江戸三大呉服店の越後屋(現・三越伊勢丹百貨店)・白木屋(白
木屋百貨店)・大丸(現・大丸松坂屋百貨店)
33) 浮世絵の右上に見られる小形の挿絵
34) 前掲31) p.63
35) 『名品揃物浮世絵』4 歌麿Ⅱ ぎょうせい 1992 p.134
36) 水野稔編『洒落本大成』第13巻 中央公論社 1981 p.313
37) 前掲9) pp.204-205
38) 拙稿「江戸時代後期の掛香に関する一考察」『文化女子大学
紀要』21 文化女子大学 1990 pp.13-18
39) 前掲5) p.296

表1の図版出典

- 日風：黒川真道編『日本風俗圖繪』第1輯 日本風俗圖繪刊行
會 1914 p.201
肉筆：『肉筆浮世絵』第9巻 祐信 雪鼎 集英社 1982
浮：『浮世絵八華』1 春信 平凡社 1985
揃1：『名品揃物浮世絵』1 春信 ぎょうせい 1991
揃2：『名品揃物浮世絵』2 清長 ぎょうせい 1991
揃3：『名品揃物浮世絵』3 歌麿Ⅰ ぎょうせい 1991
揃4：『名品揃物浮世絵』4 歌麿Ⅱ ぎょうせい 1992
揃5：『名品揃物浮世絵』5 写楽 ぎょうせい 1991
揃6：『名品揃物浮世絵』6 豊国・国貞 ぎょうせい 1992
揃7：『名品揃物浮世絵』7 国芳・英泉 ぎょうせい 1991
揃9：『名品揃物浮世絵』9 北斎Ⅱ ぎょうせい 1992
歌：「歌川国貞—美人画を中心に—」 静嘉堂文庫 1996
没：太田記念美術館編「没後一五〇年記念歌川国貞」 2014
原5：『原色浮世絵大百科事典』第5巻 風俗 大修館書店
1980
原6：『原色浮世絵大百科事典』第6巻 作品1 師宣—春信 大
修館書店 1982
原7：『原色浮世絵大百科事典』第7巻 作品2 清長—歌麿 大
修館書店 1980
原8：『原色浮世絵大百科事典』第8巻 作品3 写楽—北斎 大
修館書店 1981
鳥：「鳥居清長 江戸のヴィーナス誕生」千葉市美術館 2007
写：中右瑛・富田智子・神戸新聞社編「写楽と豊国—役者絵と美
人画の流れ—」神戸新聞社 2015
大：「大浮世絵展 歌麿、写楽、北斎、広重、国芳夢の競演」読
売新聞社 2019-2020